

今日のみことば

□ 6月11日(日) ニペテロ 2章

偽教師たちの最も悲しむべき罪は、心の定まらない者を肉欲の罪と放縦に誘惑したことです。主の裁きは間違いなく下されます。

□ 6月12日(月) ニペテロ 3章

主の日は必ず来る。世の終わりが来る。主がその来臨を遅らせておられるのは、一人も滅びることを望まず、悔い改めるのを待っておられるからです。

□ 6月13日(火) 一ヨハネ 1章

私たちの交わりはきよい交わりです。私たちの交わりは、キリストを中心とした交わりです。これはキリストの十字架の愛の犠牲によって生まれた交わりです。

□ 6月14日(水) 一ヨハネ 2章

私たちが与えられた戒めは、兄弟愛です。光の中を歩む私たちには、それができます。信仰生活は成長の段階があります。子ども→若者→父。神を知る知識によって成熟していく。

□ 6月15日(木) 一ヨハネ 3章

キリスト者は神の子どもとして、神に似たものとをならねばならない。この世の人がそれを認めることができないのは、私たちが本当に神の姿を現しているかが問題です。

□ 6月16日(金) 一ヨハネ 4章

異端を見分けるひとつのコツは、救い主についてのどのような見方や教理を持っているかということです。愛は異端と真のキリスト教とを区別する点でもある。

□ 6月17日(土) 一ヨハネ 5章

信仰生活は戦いの生活です。私たちが神の側につくと、早速悪魔は猛然と攻撃を開始してくる。愛と真の信仰を持つ人々が勝利者です。世に打ち勝つ勝利、それは私たちの信仰です。

ろば No. 1819

2017年 6月11日
日本バプテスト 立川キリスト教会
牧師 大川 博之

箴言 22:6

若者を歩むべき道の初めに教育せよ。年老いてもそこからそれることがないであろう。

家族の救いは私たちの心からの願いです。子どもたちと共に神を礼拝したいとの願いです。そこで私の心に浮かぶみ言葉がありますそれが「あなたの若い日に日、あなたの造り主を覚えよ。〈青春の日々にこそ、お前の創造主に心を留めよ〉」(コヘト12:1)のみ言葉です。

私たちは伝えるべきものを、しっかり伝えてきたでしょうか。今日の社会の若者の生きる姿に、それが見られるでしょうか。毎年、成人式の若者の行動のニュースは、伝えられるべきものが伝えられていないもどかしさを覚えることでした。神は天地万物を創造されたとき、私たち人間に、その被造物のひとつ一つをしっかりと管理する務めを託されました。最初の人は

それを放棄して罪を犯しました。今日の私たちも同様に、神が託された務めを果たすことなく、今日の世界は様々な混乱の中にあります。

パウロは「父親たち。子どもを怒らせてはなりません。主がしつけ諭されたように、育てなさい」(エペ7:4)と言いましたここでは子どもを心身ともに育て上げるという人生最大の難事が要求されているのです。しかし私はそこに「主がお認めになる愛のこもった訓練と、助言や忠告を与えて育てなさい」とある言葉に注目するのでした。これは私たちの歩むべき姿勢の基本の基本です。時として私たちは、この大切なものを失念して

いることがあります。箴言は「若者が歩むべき道の始めに教育せよ」と言いました。「年老いてもそこからそれることはないであろう」と言いましたが、言い得て妙です。

「若者よ、大志をいだけ」と残したクラーク博士は、日本政府の依頼を受けて札幌農学校の教師となりました。赴任するに当たってキリスト教を教えるはならないと釘を刺されましたがキリストに愛されているのに、イエスをこれからの若い人たちに教え、伝えないではおれませんでした。イエスを日本の人々に、学問と同時に教えたいと日本に来たのですから、その主張を曲げられず、政府の黙認という形で、クラーク博士は多くの日本のキリスト教界に、そして日本国に貢献する多くの人たちを育てました。私はそこに、天地創造の初めに神が人間に託された働きを思い起こさせていただくのです。

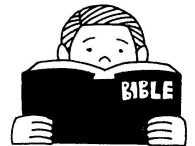
私たちの祈りは、パウロが言う「わたし自身、兄弟たち、つまり肉による同胞のためならば、キリストから離され、神から見捨てられた者となってもよいとさえ思っています」(Ⅰコリ9:3)との思いです。それはキリスト・イエスの十字架の福音をしつかりと語ることがなければかなわないことです。いかに神に愛されている私であるかを知ることなしにはそれはかなわないことです。私はもう一度モーセが主からうけて民に伝えた言葉を思い出さずにはおれません。「聞けイスラエルよ。我らの神、主は唯一である。あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい」(申命記6:4)と。しっかりと伝えて行きたい。

————— 《 聖書の学び・祈祷会 》 —————
創世記35:1-15 再びベテルへ

ヤコブはヨルダン川の東で、兄エサウあってから、なかなか父ヤコブがいるヘブロンには帰ろうとはしなかった。それはおそらく家人たちが偶像礼拝者であったからではないかと推測される。シュケムで起こった不祥事は、ヤコブを決断させました

そこでヤコブは家人に向かい、神がいかに自分を守って下さったかを話した聞かせ、ことにベテルで起こった神の助け、その夜の神の加護を話し、ベテルに行くことは当然であると語り偶像を捨てさせ、それを土に埋めてしまいました。そしてベテルに行き、感謝の捧げ物をしました。

ここでヤコブは名をイスラエルと呼ばれるようになります。その意味は「神と格闘する者」です。ヤコブの困難と試練の人生を象徴するものでした。多くの人は信仰の入れば、問題のない人生を歩むことができると思ってる。人生の嵐の中を神と共に歩み、勝利してゆくことです。



Read God's Word.